



■RSウイルス感染症について

RSウイルス感染症について

乳幼児の肺炎の50%を占めるといわれ、重症化が話題になったRSウイルス感染症とはどんな疾患でしょうか。

RSウイルス感染症とはRSウイルスという小型球形ウイルスが、伝播することによって発症する呼吸器感染症です。生後1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の児がRSウイルスの初感染を受けるとされています。また感染力が強く生涯にわたり何度も顕性感染をくり返すといわれています。主な感染経路は、飛沫感染と接触感染で潜伏期間は2～8日(4～6日が典型的)とされています。またウイルスの排泄期間は7～21日と長いので感染が広がりやすいのです。



症状としては発熱、鼻汁などの上気道炎症状が数日間つづき、その後咳や痰など下気道炎症状が出現してきます。下気道、特に細気管支に炎症が及ぶと細気管支炎となります。細気管支炎になると、ひどい咳や呼吸困難になることもあるので注意が必要です。



小学生以上の子供や大人の再感染例では、典型的な症状を呈さずにRSウイルス感染と気づかれない軽症例も多数存在することから、家庭内の感染や乳幼児の集団生活施設等での流行を効果的に抑制することが難しい場合が多いとされます。

乳幼児、とくに低出生体重児や心肺に基礎疾患をもつ児、免疫不全が存在する場合には重症化のリスクは高く、しばしば遷延化、重症化することがあります。

通常冬期(11月～2月)に流行がありますが、2003年11月から始まった感染症発生動向調査週報によりますと、2011年から2012年と2年つづいて7月頃からの流行がみられているという報告があります。今年の夏の報告数の増加が始まった第28週以降(7月から)の約3か月間では、1歳児の報告の割合が最も多く占めているということです。



予防方法としては、家族全員で手洗いを励行するなど、インフルエンザなどとも共通します。

担当: 検査課